

---

# Kanon ～笑顔の消えた日～

気まぐれな鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Kanon ～笑顔の消えた日～

### 【Nコード】

N8694M

### 【作者名】

気まぐれな鴉

### 【あらすじ】

1日のデートが終わり、噴水へとたどり着いた栞と祐一。そして、誕生日を迎えると同時に倒れてしまった栞。冷たくなった彼女がそのまま目を覚ますことのない眠りについたとしたら・・・？繋がった彼との想い、繋がらなかつた彼女との想い。そんな想いを残し、物語はどんな展開を迎えるのか。

これは、そんなありえたかもしれない悲しいIFの物語。

1月31日

俺は彼女と一日中デートを楽しんだ。

2月1日

彼女の誕生日。

この日を迎えた時、それは彼女の命日ともなった。  
プレゼントを渡すことも、16歳の誕生日を祝うことさえ叶わなかった。

もし、あの時無理やりにも病院に連れて行ったら彼女は助かったかもしれない。

もし、デートの日をずらせば彼女の誕生日を祝ってあげられたかもしれない。

けれど所詮それはIFの話。俺は、後悔しないと決めた。それは彼女から教わった本当の強さというものだから。

ただ、一つだけ俺は間違えていたのかもしれない。

『奇跡は、起こる可能性が少しでもあるから奇跡という』

俺はそう思っていた。けれど実際は、

『奇跡は、起きないから奇跡と言う』

こちらのほうが正しかった。

そのことに気がついた時、俺は冷たくなった彼女の体を抱きしめ、

静かに涙を流した。

「栞……」

雪の降る公園で、俺は栞を抱きしめ泣き続けた。

### 『笑顔の消えた日』

2月1日

ひとしきり泣いた後、俺は栞を彼女の家を送り届けた。そして、一度家に帰って制服に着替えた。秋子さんに声をかけられたが、学校を休むことだけ伝え、家を出た。

俺が栞の家に着くと、栞の両親は葬儀場の人と打ち合わせをしていた。入り口に立つ俺に気がついたようで、打ち合わせを中断し、こちらに近づいてきた。

「相沢・祐一さんでよかったかしら？」

「はい、相沢祐一といいます」

栞の両親と会うのはこれで2回目だったが、嫌な顔一つせずに迎え入れてくれたのは正直ありがたかった。

「見ての通り、私たちは打ち合わせの途中でね、色々な話は後にしよう」

「あの子は奥の和室にいるわ。あの子の、傍にいてあげてくれる」

「わかりました。俺は栞についていますね」

「ええ、お願いね。今、姉の香里がついていると思うから」

それだけいうと、栞の両親は打ち合わせに戻っていった。そんな二人の背中を見送り、俺は栞のいる和室へ向かった。

冷たい廊下を進み、襖を開けると、暖かな空気が俺を迎えてくれた。その部屋の中には、静かに横たわる栞の姿があった。

「……香里はどこに行っただんだ？」

この部屋にいるべき人物の姿が見えず、部屋の中を見渡していると、背後から階段を下りてくるような足音が聞こえた。状況から考えれば、足跡の人物は一人しかない。俺は降りてきたアイツに、栞を一人にしたことについて文句を言ってやろうと思った。

「あら、相沢君。あなたどうしてこんな所にいるの？」

こちらが振り向く前に、後ろから声をかけられる。

（さて、なんて文句を言おうか）

そう思いながら後ろを向き、喉まで上がっていた言葉を・・・飲み込んだ。そこには、制服姿で鞆を持った美坂香里が立っていた。

「・・・まあ、深くは聞かないで置いてあげるわ。学校、遅刻しないようにしなさいね」

香里はそれだけ言っと、そのまま玄関へと歩いていった。そんな彼女の背中を見て、俺は彼女の言葉を思い出した。

『最初から・・・妹なんて、いなければよかった・・・って・・・』

そして、気がついた。香里は栞を失った事を認めたくなくて、あの時の、あの言葉に逃げているのだと。予想外の出来事に立ち尽くしていたが、玄関から聞こえた大声で我に返った。

「香里！あなた、こんなときにどこへ行くの！！！」

「どこって、学校に決まってるじゃない。私、今日も朝練だから早くいかないよ」

「栞が、妹が死んだその日に学校行く必要はないでしょ！」

「何言ってるのよ。私には、最初っから妹なんていなかったわよ」

「香里！！！」

「それじゃ、いつてきます」

母親が伸ばす手を遮るかのように扉を閉め、香里は学校へ行ってしまった。

「すまないね、相沢君」

「っ！・・・栞の、お父さん」

「香里も香里でショックだったんだよ。だから、あんなことに・・・」

栞の父親は、淡々とした口調で香里を弁護している。しかし、その顔は、悲しみや苦悩などでいっぱいに見えた。

「いえ、わかってます。香里は、いい奴ですから・・・」

「そうか・・・ありがとう。すまないが、君だけでも栞の傍にいてやってはくれないか？一人ではきつと、寂しいだろうから・・・」

「謝る必要なんてないですよ。俺は、俺の意思で、栞の傍にいたいだけですから」

「・・・ありがとう」

それだけ言い、栞の父親は、玄関で呆然としている母親の所へ歩いていった。

「・・・さてと」

俺は、俺に出来ることをしないと。そう思い直した俺は、栞の傍に行き、その小さな手を握った。

その手はとても冷たく、栞が死んだことを俺の心に訴えてきた。けれど俺は、彼女が寂しくないように、その手を暖めるように握り直した。

香里が帰ってから通夜を始める予定だったが、夜になっても香里が帰ってくることはなかった。学校に連絡して確認して貰ったが、もう帰っているはずだと言われたらしい。時間の都合もあり、仕方なく通夜を始めることになった。一人少ない通夜は、静かに始まりを告げた。そして、香里が帰ることなく、通夜は終わった。

香里は朝になっても、お昼に行われる告別式の時間にも顔を出さなかった。そして告別式も終わり、栞と火葬場へ向かうこととなった。

栞の棺を霊柩車へと運び、俺は栞の両親に声をかけた。

「それじゃあ、俺はこれで帰ったほうがいいですね」

このまま最後まで一緒にいたかったが、看取ることさえできなかった両親の気持ちを考えると、俺の都合だけで参列することはできない。栞のために買った誕生日プレゼントは、彼女の棺の中に入っている。ここまで俺のやりたいようにやらせてくれたご両親には、どれだけ感謝をしても尽くせない。

栞の両親に頭を下げ、せめて見送りだけはしようと、他の参列者の列に並ぼうとした。しかし、服の袖口を掴んだことにより、俺の脚は止まったままとなった。

「いや、君には無理にでも参列してもらいたい」

袖口を掴んだのは、栞の父親だった。

「いや、でも他の親戚の方が参列するんじゃない・・・」

「確かに、他の親戚の人達も行くわ。でもね、あなたが参列してくれたほうが、栞も喜ぶと思うの・・・」

それだけ言うと、栞の母親は顔を俯かせ、肩を震わせた。父親が彼女の肩を抱き、その手を握るが、彼の視線は俺に向いていた。

「それなら、どうか俺を参列させてください」

俺は、そう言いながら頭を下げた。それに対し、栞の両親は涙を溜めた笑顔で答えてくれた。

参列者を乗せたバスが出ようとしていたが、この時間になっても香里は帰ってこなかった。栞の両親は、会場の入り口を何度も見ていたが、栞を乗せた霊柩車が出ると、諦めるように椅子に深く腰を下ろした。

「・・・・・・・・」

けれど俺は、会場の入り口を見つめ続けた。

「相沢君、移動するよ」

「香里なら大丈夫よ、きつと追いついて来るから」

そうは言っているが、諦めているのが顔から分かる。

「すみません。先に行ってください。俺は、香里を連れて後から追いつきます」

けれど、俺は諦めない。香里に送られずに、栞が成仏できるとは思えない。

「しかし、相沢君・・・」

「俺のことなら心配いりません。大丈夫ですから、行ってください」

「相沢さん、だから香里のことは・・・」

「・・・お願い、できるかな」

母親の言葉を、父親が遮る。

「あなた・・・」

「相沢君。香里を、頼む・・・」

そういつて父親は頭を下げた。それに対し俺は、

「まかせてください。必ず、二人で追いつきます」

そう言つて胸を叩いた。

車走り去る。俺の手には、火葬場を示した一枚のメモがあるだけ。

栞の火葬が終わるまでに、香里を見つけ、連れて行かなければならない。俺は会場の入り口で電話を借り、ある人物へ電話をかけた。コール音が鳴り続ける。

（早く・・・早く出してくれ）

そんな思いが通じたのか、数コールで電話が繋がった。

「はい、水瀬です」

「もしもし、名雪か？俺だ、祐一だ」

「えっ、祐一。今日は一体どこに行ってたの？心配したんだよ」

「あゝ、それについては後だ。それより、香里の奴知らないか？」

「えっ、香里？香里なら昨日、気分が悪いつて言つて早退から会つてないよ」

「そうか、なら香里の奴が行きそうなところ知らないか？」

「香里の行きそうな場所？それだったら、私より北川君のが詳しいんじゃないかな？」

「そうか、ありがとな、名雪！」

「え！ちよつと祐い・・・」

最後、何か言っていたような気はするが、今はどうでもいい。次は、北川の家だ。

「はい、北川です」

「北川か？俺だ、相沢だ」

「お、相沢。昨日はどうしたんだよ、サボリか？」

「そんなことはどうだっていい！それより、香里の行きそうなところを教えてくれ！」

「なっ！なんでお前が香里のことを聞くんだよ！いいか、もう一回だけ言つとくけどな、香里は俺の・・・」

「いいから教える！！！」

「うわっ！・・・わかったよ、香里の行きそうなところだろ？それだったら・・・」

「・・・わかった、サンキュな」

「おい、相沢。一体なにが・・・」

受話器を叩きつけるように電話を切る。目星はついた、あとは行動あるのみだ。俺は、北川から聞いた情報を頼りに、町へと走り出した。

「香里！いるか！！！」

大きな声で叫んでみる。しかし、反応は返ってこない。

「クソっ！ここもハズレか、もう他に候補ないぞ」

あれから北川の情報を頼りに、片っ端から当たってみたが、その全てがハズレだった。

「もう時間もないっていうのに・・・」

俺は焦っていた。栞の両親と別れてからそろそろ一時間が経つ。

「他に香里が居そうなところなんて・・・！あつた！！！」

諦めかけた時、ある場所が浮かんた。これで駄目なら諦めて、香里が自分の意思で火葬場へ行ったと信じるしかない。そう考えながら、俺はある場所へ向けて走りだした。

学校。

以前、香里に呼び出されて栞の話を聞かされた場所。

（ここにいなかったら・・・）

体力はとくに限界を超えている。走り続けた足は、鉛のように重い。体力の限界が見えた時、あの場所に一人の人影が見えた。切れた息を気合で静め、声を張り上げる。

「・・・ハアハア、ツ！香里！！！」

その人影は、まるで俺が来るのを解っていたかのように、こちらへ振り向いた。

「こんにちは、相沢君。そんなに息を切らせてどうしたの？」

「ハアハア、香里が、帰って、来ない、から、迎えに、着た、んだよ」

「どうして相沢君が迎えにくるの？それに、私は今から帰ろうと思っていたところよ」

香里は、いつもと変わらない様子で受け答えをしている。けれど、その言葉の端々に耐え切れない悲しみがあるのがわかった。

「はあはあ・・・ふう、今から帰っても、栞はもういないぞ。・・・火葬場だ」

「・・・栞って誰？そんな人、私は知らないわ」

「無理なんかしないでいい。さあ、一緒に行くぞ」

そういつて俺は香里に近づいた。

「いい加減にして！相沢君、あんまりふざけていると怒るわよ！！」

「最初から、妹なんていなければいい・・・か？」

「ッ！」

「栞が、何のために産まれてきたのか？そうも聞いたな」

「・・・何のこと。私。そんなこと言った覚えないんだけど」

そう言った香里の顔は、さっきまでとは違った。あの雪の日、泣き崩れる直前のあの顔だ。

「産まれてくる理由なんて、必要ないんじゃないか？」

「・・・それ、どういう意味？」

「生きる理由は必要だと思う。それは人生の目標となり、生きる力になるからな。でもな、産まれて来る命に、何故産まれるのかって理由はないんだと思う」

「・・・生きる理由」

「香里は、栞が何で産まれてきたのかを疑問に思っていたな。そんなものは、ないんだよ。そして、栞が何のために生きたか・・・それなら、香里は答えを持っているんじゃないか？」

「あの娘が、生きた理由・・・」

「・・・もう時間がない。香里。おまえは本当に、妹なんていないのか？」

「私に妹なんか・・・妹・・・なん・・・か・・・」

二人の間に風が吹く。

2月にも関わらず、とても暖かな風。

そしてそれは、一人の少女の心の氷を溶かす、優しい風だった。

「栞！」

香里が胸に飛び込んできた。まるで、あの時のようなワンシーン。失われた防波堤の影響か、彼女の想いの奔流は、涙となって現れた。俺は彼女の想いを受け止め、そして共に泣いた。

「・・・香里、栞のところへ行こう」

落ち着いてきたところで香里に声をかける。

「ええ、行きましょう」

香里もしつかりとした返事を返し、動き出す。二人の気持ちは一緒だった。栞のところへ・・・

「あなた、もう始めないと・・・」

「ああ、わかつている」

相沢君と別れた後、栞の火葬は順調に進んでしまい、先ほど終わった。本来ならすぐにでも収骨に移るところだが、私は彼の言葉を信じて待っていた。しかし、それももう限界だろう。何より、あの娘をあの状態のまま、これ以上待たせることは出来ない。

「・・・行こうか」

収骨する部屋に入る直前まで入口を見ていたが、結局、間に合わなかったようだ。部屋の中央には、すでに原型をとどめていない自分の娘が横立わっていた。

「それではこちらを・・・」

「ああ、ありがとう」

係員から木の箸と竹の箸を一組ずつ渡される。

「ほら、これを・・・」

私はその箸を木と竹一本ずつ持ち、残りを桤から目をそらしている妻へと渡した。彼女は震える手つきで、けれどもしっかりとその箸を掴んだ。

「それじゃあ、始めようか」

私は目から涙を流す妻の肩を抱き、一緒に一つ一つ丁寧に収骨を行っていった。身近な骨から収めていき、そろそろ終わりが近づいた時、後ろのドアが勢いよく開いた。

火葬場へ向かうタクシーの中、突然、香里が口を開いた。

「ねえ、相沢君。なんで私を呼びに来たの？あの娘が、桤が望んでいると思っただから？」

その顔は無表情のはずなのに、どこか弱さを感じさせる。

「そうだな。たぶん、そういう理由なんだと思う」

「何よそれ、曖昧ね。・・・なら、私が一緒に行かない可能性は考えなかったの？」

「それは考えなかったな」

香里の表情が驚きに変わる。

「どうして？私、あの娘が死んでも学校に行っただのよ？」

「確かに。でも、もし香里が本当に桤のことをいかなかったことにしたかったとしたら、あの日、俺を呼び出したりはしなかっただろうからな」

「それは・・・その・・・」

「それに、美坂香里は弱いくせに強がりな、優しい奴だって知って

るからな」

（そうだよな、栞）

「なっ！」

今度は香里が変な顔をしている。ふと前を見ると、火葬場が近づいているのが分かった。

「香里」

「な、何？」

「タクシーから降りたら走るぞ。栞が待ってる」

「・・・わかったわ」

そういうと、香里の表情が引き締まった。

（きつと、気がついてるんだろっな・・・）

もしかしたら、全部終わっているかもしれないことを・・・

タクシーから降り、受付に向かう

「すみません、美坂家の火葬ってまだやっていますか？」

「美坂家ですか？美坂家なら、今あちらのお部屋で収骨をやっています」

（よかった、間に合った！）

「ありあとございます。香里、行くぞ！」

「ええ！」

二人で廊下を走り、ドアを開ける。大きな音を立て、ドアが開く。部屋の中には中央に栞の骨らしきものと彼女の両親、そして驚いた顔をした係員がいた。

「すみません、遅れました」

俺たちの登場に係の人は驚いていたが、栞の両親は暖かく迎えてくれた。

「お父さん、お母さん・・・ごめんなさい、私・・・」

「いいのよ、香里。もういいから」

謝罪を続ける香里を、母親が優しく包み込む。母親の胸の中で香里は、小さな子供のように泣いていた。

「相沢君」

二人の姿を見ていると、栞の父親に声をかけられた。

「あ、すみませんでした。遅れたばかりか、突然乱入してしまつて」

「いや、そんなことはないよ。それよりも、ありがとう。香里を連れてきてくれて」

それだけいうと、彼は深く頭を下げた。

「そんな、頭を上げてください。香里が・・・彼女が行こうって思つただけですよ」

「それも、君が背中を押してくれたおかげだと思う。本当にありがとう。後少しだが、君も香里と一緒に収骨をしてくれないか？」

そう言いながら、木と竹の箸を一組渡される。

「はい、ありがとうございます」

俺はそれを受け取り、香里のところへ向かった。

「香里、収骨をしよう」

「相沢君・・・わかつたわ、やりましょう」

香里は母親から箸をもらい、二人で栞の前に立つ。箸を向けようとした時、近くからカタカタという音が聞こえた。音の出所を探すと、香里の持つ箸が音をたてて震えていた。俺は香里の手を空いていた手で包み込む。香里は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに目を閉じ、気持ちを落ち着けていった。少しすると香里の震えは治まり、目線はしっかりと栞を見つめていた。

目で確認を取り合い、二人でお骨上げを行う。一つ、一つ、ゆっくりと丁寧に・・・そして、最後の欠片を納め終えた。その後、木と竹の箸を係員に返し終えたところで俺の意識はなくなった。

夢

夢を見ている

仲のいい姉妹が、仲良く学校に通っている

一緒に登校して、一緒にお昼を食べて、一緒に帰る

そんな、ありふれた日常の一コマ

あの二人が望んだ日常

「・・・さん」

「・・・ん」

「祐一さん」

「ん・・・栞か？」

「はい！」

彼女の声がある。俺の大好きな、あの少女の声が。ゆっくりとまぶたを開ける。そこには白い世界の中心で、一人の天使しおりが立っていた。

「栞・・・ここは？」

右も、左も、上も、下もない。この白い世界には、俺と栞以外のものは何もない。

「ここは、夢の世界」

「夢？」

「そう、優しい夢や楽しい夢、悲しい夢も辛い夢も全てはここから始まるんです」

「全ての始まり・・・か」

さっきの夢もここから始まったのか・・・

「栞はどうしてここに？」

「わかりません」

「え？わかないって、どういうことだ？」

「気がついたらここにいて、ここを守らなければいけない。それだけは解ったんです」

「なら、俺も一緒にここに・・・」

『いるよ』

その言葉の先は、彼女の指で止められた。

「ダメですよ、祐一さん。祐一さんにはまだやることがあるでしょう」

『でも、栞と一緒にいたい』

目だけで、栞に想いを伝える。しかし、栞は首を振るだけだった。  
「ここに残るということは、もう戻れないということです。祐一さん、みんなを傷つけてまで残るなんてダメですよ」

（みんな・・・）

「それに、別に今すぐじゃなくても私はここにいます」

栞が背を向け、離れていく。

「ずっと、ここで待ってます」

「栞・・・」

「だから、祐一さんは戻ってください。私はなら大丈夫ですから」  
振り向いた栞の顔は笑顔だった。目に涙を溜めながら、それでも満面の笑顔・・・。

（なら、俺のやることは・・・）

「わかった、俺は戻ることにするよ」

「ッ！・・・はい、わかりまし・・・」

栞が何か言う前に、彼女の抱きしめる。

「必ず、必ずまた会いに来るから・・・だから待っていてくれ」

「・・・はい。私、待ってます」

彼女の気持ちを涙と共に受け取り、俺は誓った。

（必ずここに戻ってくる！）

気がつくとも栞は涙を止めていて、いつもの栞に戻っていた。  
「それじゃ、そろそろ行くよ」

「わかりました」

栞の体を離す。彼女はしっかりした目で、こちらに向き直った。

「次に来る時は、ちゃんとした案内人が来るんだよね？」

「はい、勿論です。私がちゃんと迎えに行きます」

「栞に会いに来るんだし、迎えはもつと天使って感じな綺麗な子がいいな」

「ううー、そんなこと言う人嫌いです！」

いつものようなやり取り。栞は大丈夫だと思うには、それだけで充分だった。

「でも……」

「でも？……続きは？」

「でも、祐一さんは大好きです！」

そうだった彼女の笑顔は、この世界に負けなくらいまぶしかった。世界が白く染まっていく。どうやら目覚めのときらしい。

「そうだ、祐一さん。一つ言い忘れてました」

声が聞こえる。返事を返したいのに声が出ない。

「お姉ちゃんを連れてきてくれて、ありがとうございました」

世界が移り変わる直前、最後に聞いた彼女の言葉だった。

「ん……ここは？」

「相沢君、目が覚めた？」

「香里？ここは一体……」

「栞の部屋よ。相沢君ったらいきなり倒れるんだから、ビックリしたわよ」

「そうか……」

辺りを見渡すとスケッチブックやアイスの箱など、栞の部屋らしいものが目についた。

「すまなかつたな、香里。迷惑をかけて」

「いいわよ。迷惑なら私たちのほうが沢山かけたんだから」

そういいながら、香里は机の上に目を向ける。そこには、仲の良  
い姉妹の幸せの瞬間が納められていた。

「さて・・・と」

体を動かそうとして、ベッドに尻餅をついた。

「無理しないの、なんか過労みたいよ。さつき名雪に連絡取ったか  
らすぐに迎えが来るわ」

その時、タイミングを計ったようにチャイムが鳴った。

「香里、来たよ」。祐一は大丈夫？」

「・・・ちょうど来たみたいね。ちよつと待ってなさい、今連れて  
くるから」

香里が部屋を出て行く。

「ちよつと待った！」

「何？」

香里が振り向く。

「さつき、夢の中で栞に会ったんだ」

「ッ！・・・それであの娘、何だって？」

「香里が来てくれて、嬉しかったみたいだぞ」

「そつか・・・まったく、恨んでくれてよかったのに」

「それが出来ないのは、お互いよく知っているだろ」

「・・・そうね。あの娘、そういう娘だもんね」

今度こそ、香里が部屋から出て行く。

窓の外には星が輝いていた・・・

「栞。いつになるかわからないけど、待っていてくれな」  
星を見ながら俺は栞に想いを送る。

（はい。私、待ってますね）

星の中で琴が微笑んだ気がするの、気のせいなのかもしれない。

## （後書き）

数年前に執筆したK a n o nの小説がH Dから発掘されました。その作品を手直しを行い、投稿しました。

栞があのまま亡くなった場合、残された人々はどうするのか？そんな疑問から産まれた作品です。

思いつきで書いた作品だったので、葬儀についてはおかしい点があるかもしれませんが。その点については、目を瞑っていただけると助かります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8694m/>

---

Kanon ～笑顔の消えた日～

2010年10月8日13時42分発行